

なみに紹介者の所蔵している本書の番号は、二二六番である。

紹介者は、十三年程、歯学部において、医学史、歯科医学史の講義を担当しているが、年を追うごとに医史学に対する興味を失う学生が多くなってきたようである。しかし、学生から、昔の白衣、手袋、帽子、あるいは医療器具がどうであったか、個人的に質問を受けるケースも多く、このような時、実際の史料を見ると興味を示す学生がまだいることも事実である。しかし、常に豊富な史料が手元にあるとは限らない。本書では、「不許複製などと堅苦しいことは全く考えていません。気軽に斯界のために活用していただければ、著者は望外の喜びといたします。」とはじめにことわりがきがあり、本書のような豊富なコレクションを、パワーポイント、スライド、OHPで学生に提示すれば、教育効果があがると確信する。このような、ビジュアルな史料を提供いただいた著者に、医史学講義の担当者として、御礼申し上げます。

本書の特徴として、医療機関及び病院の勃興と推移、日本赤十字社と救護活動に多くのページ数を割いていることである。これは、絵葉書が記念的な性格をもっている以上、その建築物に対する出版が多くなるのは必然であるが、講義・実習風景あるいは診療風景の絵葉書まであり、個人情報保護法のうるさい現代からみると隔世の感がある。また各種建築物は、装飾性の強い建築から、合理的な設計へと移り変わる様子がかがえ、建築史の史料としても、見る

べきものがあると考ええる。このような、各医療機関の絵葉書は、その卒業生や関係者には、大いなる郷愁をさそうものであるが、著者は医史学者として冷静な解説を加えていることも特徴的である。

多様な内容をもった本書であるが、最後には、「医とは」という章で、小川鼎三先生の言葉を引用して、「医学は医学問的に考えた時かおこる」とし、緒形洪庵、ルイ・パスツール、ルドルフ・ウィルヒョウらの絵葉書を取り挙げ、医の倫理に言及してしめくくっている。是非、廉価な普及版を作つて、配布していただけないかと願うしだいである。

本書は、二〇〇六年の矢数医史学賞を受賞した。御祝いを申し上げます。

(西巻 明彦)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、電話〇七五  
一七五一―一七八一、平成十六年十二月十日、二四五頁、  
本体三二〇〇円〕

鈴木 厚 著

「世界を感動させた日本の医師」 信念を貫いた愛と勇気の  
記録

本書は現在の日本の医療を問い続けている鈴木厚氏が、一世代または二世代前の四人の日本人医師をとりあげて、その

人物史と社会を世界的な評価の中で書き下ろされた好著である。四人を副題と共に紹介する。

永井隆・浦上の聖人・自らの被爆を省みず多くの患者を救済。

荻野久作・世界の荻野・受胎の神秘「排卵と月経」の謎を説明。

萩野昇・富山のシユバイザー・イタイイタイ病の原因を究明し患者救済へ。

菊田昇・世界生命賞受賞・胎児を守るための「赤ちゃん回転」の真実。

四名とも日本の近現代の医療史の中で高名な方であり、そのなされた業績は多くの人を知るところである。鈴木氏が書き下ろされた本書には業績を超えた四人の人物像と、それを取り巻く社会の変化が鮮明に書き込まれており、歴史小説を読むような楽しみを持って一気に読み終わらせる力がある。鈴木氏は「おわりに」でこの四人をとりあげた理由を次のように書いている。「現在の日本人が失いかけているものは、相手を思う気持ちであり、愛情であり、誇りである。そして正しい信じて行動する勇氣である」「本書では、患者を第一に考え医師としての信念を貫いた四人の医師を題材にした」「医師と患者は同じ人間である。そして病氣という共通の敵と闘う戦友である」「この四人の医師たちを現在の人たちの多くは知らないであろう。彼らこそが本当に尊敬すべき、世界に誇るべき、さらには歴史に残すべき医師であり人間であ

る」本書を貫く著者の眼差しは上記の文の中に尽くされている。紹介者は著者と同世代であり、とりあげられた四医師について、少しは知るところがあったが、四人について本書から学んだ感動的なエピソードを紹介し、本小文を読まれた方が本書を手にして、そして多く若者に、本書をお勧めいただくことを願う。

永井隆(一九〇八―一九五二)長崎原爆では長崎医科大学の教職員の八割が亡くなっている。物理的療法科助教であった永井隆は重傷を負いながらも救護活動とその後の被爆医学者としての学術報告書の提出、キリスト者としての著作活動をしたことが良く知られている。しかし彼は生来のキリスト者ではなく、学生時代までは唯物論者であり、満州事変出征帰国後に、後に妻となり被爆にて亡くなることとなる夫人の影響で洗礼を受けたという。また昭和二十年初頭には体調不良があり、慢性骨髄性白血病で余命三年との診断を受けていた。放射線医学者としての被爆から起こったと考えられる疾病にすでに罹患していた。作品が映画化された『長崎の鐘』や『この子を残して』しか知らないで来たが、昭和二十六年五月になくなるまでヘレン・ケラーや昭和天皇の見舞いを受けながら残した多くの作品がこれからも忘れられないことを願う。

荻野久作(一八八二―一九七五)篠田達明氏の書かれた『法王庁の避妊法』で学生時代に習ったオギノ式避妊法の発明について読んでおられる方も多いと思う。東京帝国大学を

卒業した俊英が早期に中央の学界からはなれ、新潟にて産婦人科の臨床医として一生を過ごした経緯は本書の中に詳しい。オギノ式の発明が「排卵と月経」の關係についての研究で世界的な学説や日本の学界の動向からはなれ、自分の臨床における観察と、妻の協力による受胎確認によりなされたわけだが、このような研究はEBM万能の時代には出てきにくいものかもしれない。また萩野は自説を持ちドイツへの私費留学を果たし、そこでの自説の紹介が世界的に認められ、日本での評価よりも高かったことは、日本のアカデミズムのあり方へのひとつの教訓となる。

萩野昇(一九一五—一九九〇)富山の奇病「イタイイタイ病」は日本の五大公害訴訟のひとつとして、必ず講義で触れられるカドミウム慢性中毒疾患である。しかしこの病気の存在と原因の解明、社会的認知に至る過程における萩野昇の苦闘はあまり広く語られることが無いように思う。旧制金沢医科大学卒業後病理学者を目指した萩野が軍医徴用にて七年の戦地勤務から帰国後、亡父の病院を引継ぎ再建してゆく過程で「イタイイタイ病」に遭遇した。高度の骨粗しょう症と劇痛を主訴とする地域の経産中年女性に多発した疾患について、地元の地方紙が奇病として採りあげるまで約十年を要している。神通川流域、萩野病院の所在する婦中町周辺のみで発生するこの病気が鉱毒によるものではないかと萩野が発表したのが昭和三十三年である。その原因を上流に存在する岐阜県神岡鉱業所に求めたが、亜鉛・鉛・砒素等を採掘する神

岡鉱業所が排出するカドミウムを原因とすることが厚生省により認められるのは昭和四十三年である。公害対策基本法の制定は昭和四十二年であるが、イタイイタイ病は県に先立ち国と地域市町村が公害を認めるといふ特別な経過をとった。この間の萩野の地域の病院長としての活動とNIHを含む内外の研究者の研究協力の中で神岡鉱業所原因説を証明できたことを疫学、臨床医学を学ぶものもつとよく知っているべきであろう。

菊田昇(一九二六—一九九一)昭和四十八年宮城県の地方紙に載った「赤ちゃん幹旋します」という小広告に始まる、産科医による偽の出生証明書発行という、戸籍法違反の確信犯的行動から始まる議論を記憶されている方も多いと思う。

出生二百万、人工妊娠中絶百万という時代に妊娠後期の中絶不可能な妊婦の問題、子供がほしいながらも子供のできない夫婦の問題に対して、「ニセの出生証明書」を発行して実子として幹旋していた菊田昇は、その事実の公表とともに、法と倫理の問題に大きな一石を投じた。地元においてもそれを支持する市民団体と、批判する産婦人科医会、医師会があり国家的な対応もあいまいであった。昭和五十一年の愛知県産婦人科医会の「公正証書原本不実記載疑い」の刑事告訴により被告とされた菊田は昭和五十三年罰金二十万円と以後行わない宣誓を行ったが、医道審議会は六ヶ月の医業停止の行政処分を行った。開業医にとりこの長期の医業停止は厳罰である。この処分に対する処分撤回のための菊田の提訴は最高

裁においても敗訴した。しかし菊田の実子斡旋の問題提起に始まる論争は昭和六十二年特別養子制度として実を結び、その後の母体保護法の改正にもつながった。法的な論争では勝つことができなかった菊田であるが、マザー・テレサとの出会いや、マザー・テレサに続く世界生命受賞者として、日本の法体系を越えたところで評価された。生殖医療の進歩に倫理問題と科学的技術の発展が絡み、法体系の混乱の整理が進まない今日であり、菊田の提起した問題は現在も存在する。

四医師の伝記を読み紹介として要約したが、著者の筆から感じられる四人に共通する徳は、信じたことを貫いて仕事をしたことであり、そこには必ずその信念を実現させる志を同じくする者があつたことであろう。そしてその仕事は、日本においてよりも海外で早くに高く認められたことを書き込んでおられる。鈴木氏の本著が四人のつくった医療の歴史を日本が忘れないために、そして日本人に勇気を与えてくれることを期待する。

(渡部 幹夫)

〔时空出版、〒112-0002東京都文京区小石川四一八—二 電話〇三—三八二—五三三三、二〇〇六年四月二〇日、B六判、二二八頁、本体価格二〇〇〇円〕

## 編集後記

本年の五月から、編集委員長を仰せつかった。日常的に生じる大小さまざまな問題に手際よく対処してこられた真柳誠氏のを引き継ぐことになるが、今後も良質の雑誌を円滑に発行していくために、多くの方々からの投稿をお願いしたい。投稿促進のために前委員会以来いくつかの方策を講じてきたので紹介する。一つは、査読の迅速化である。査読を依頼するときに三〇日以内に終えていただくようにと期限を設定した。第二は、本年の総会でも報告された、一〇頁超過分と図版製版代の著者負担の減額である。科研費による学会誌の刊行助成と印刷費の費用節減のおかげで可能になった。些細なことに見えるかも知れないが、著者としての欲求不満を減らしていただけるのではないだろうか。

日本医史学雑誌は、毎年開かれる学術集会とともに、日本医史学会の学術活動を支える大きな柱である。最近の学術・研究がしだいに専門領域を狭めていく傾向のある中で、医学の守備範囲は古代から現代まで、西欧からアジアそして日本までとさまざま幅広いことが、特徴であり大きな魅力になっている。さまざまな背景を持った研究者からの投稿によって、この multidisciplinary な学会が真に活性化されることを願っている。

(坂井建雄)